報　告

大阪女学院大学　教員養成センター　平成 28 年5月7日(土)・8日(日)

第4回「英語の教え方教室」合宿 in 若狭　於：福井県立若狭高等学校

テーマ：アクティブ・ラーニングを見つめ直す

今年もまた、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、三重、福井から約30名の高等学校と中学校の先生、大学生が集まり、福井県立若狭高等学校（三仙先生幹事）で第4回の勉強会合宿を行った。

■ 基調講演（簡易報告）

「アクティブ・ラーニングを見つめ直す」
―学習者の学びを深める言語学習活動―
大阪女学院大学 中井 弘一

1. アクティブ・ラーニングの言葉がもたらす弊害

まず、アクティブ・ラーニングの定義（身に着けた知識・技能をどう生かすか）を話された。アウトプットがアクティブ・ラーニングであると誤解されがちだが、協同学習を行うにしても、わかるレベル（Intake）の促進を考慮し、知っているレベル（Input）と「思考・考える」レベルの位相を認識し、そうしたレベルに対応した活動をしっかり組み入れたりしなければ、思考がアクティブになることはない。

アクティブ・ラーニングが求められる背景としては、米中韓の生徒にくらべて日本の高校生の「自己肯定感」の低さが目立っている。教育格差（ロボット的な子どもが増えている・教育産業が教育に入り込んでいる）が目立つ昨今、生徒の学習の様子を見て授業をすることが重要である、と話された。「やらせる」ものが多く、生徒にとって「気づき」や「思考の過程」を評価するものになっていないことが問題である（プロセス・カットの功罪）。→「受け身型の人間の育成」につながっている。「白いノート」の提案←書かれたもの、話されたものを写す（移す）だけでは、不十分で問いかけを入れる。「これはどういうこと？」と尋ねてみることが重要である。「自学ノート」で、「自分で考えてノートを作成する」というプロセスが必要であると話された。

2. では、なぜ「アクティブ・ラーニング」なのか

加えて、アクティブ・ラーニングは、学習形態に意味があるのではない。「アクティブ・ラーナーを生み出すことが重要」であり、アクティブに活動をしていることではなく、学びそのものがアクティブであることが大切である。コミュニケーションとは「異質なズレを受け入れる」ことであると話され、柔軟な思考で問題の本質を見抜き、臨機応変に対応できるリーダーの育成が必要である、と力説された。

学力の3要素「基礎的・異本的な知識・技能」「課題解決のために必要な思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」をはぐくむにはどうすればよいか。それには「どのように学ぶか」を考えていく必要がある。そこで、アクティブ・ラーニングについて我々が正しい知識を得て、生徒に思考力をつけさせる授業を行っていくことが必要になってくるのだ、と述べられた。

グローバル化の進行により、ポイントは知識を「いかに活用するか」にニーズがシフトしてきている。だからこそ、「学習者の思考をよりアクティブに」することが重要なのである。学習の「習得」サイクルと「探究」サイクルを活用型学習のもとに行っていくことで、定着を図ることが目指すべき授業の形である。

3. では、どのように「アクティブ・ラーニング」を促すのか

engagement が重要である。とりわけ、emotional に考えさせることが重要である。また、「わかる」授業であることが重要であると述べられた。学習者の思考に意味があることが重要であり、そのため教員は授業目標を明確に持ち、生徒が思考を活性化する学習活動を求めることだ。次に、有名な「Not so long ago」を題材にして、どのように生徒に思考を促すかを演習形式で説明された。すぐれた発問は深い教材研究の必然的な結果である、と述べられた。思考を促す発問を行い、生徒の「思考がアクティブ」になるように我々は授業準備、教材研究をすることがわれわれの必要条件である。講義型、生徒参加型、生徒主導型を通じて「思考を活性化する」ことが重要だ。

4. 「アクティブ・ラーニング」を再考する

アクティブか、そうでないかの二項対立でよいのか。アクティブ・ラーニングの弱点は、そこに個々人の学びが保証されているとは限らないのではないか、ということである。協同学習に対して生徒が好きであるかどうかも異なり、またこれまでの学習形態との違いに戸惑うこともあり得る。英語（らしきもの）を話し合わせるだけではなく、そうなのかと思わせる英語の手本を教師が示し、知的好奇心を育む教養を示すなどして、「生徒を」より深いアクティブなラーナーに育てていくことが重要である。「教えて考えさせる」授業の必要性。生徒の思考の活性化を促し、教員が「わかろうとしている」生徒を指導方法や指導力や指導意欲のもと、導くことが必要である、と述べられた。

報告：三仙　真也（福井県立藤島高等学校）

■ グループ討論①：

「やってよかった言語活動とその評価の在り方」（簡易報告）

1班　MC　渡辺 千景（福井県立敦賀高等学校）

中学校では授業中に3分の1は speaking 活動を行っている。（教科書に出てくる単語の読み・ペアで対話・英語の歌）文法を教える際にも、ルールを教えてから使わせるのではなく使いながら気づかせる。（帰納法）英作文の評価として、減点法よりも加点法に。（例）語彙・文法・内容・加点（5文以上）英作文の活動応用編として同じトピックについて1ページに3人で書いていく「リレーノート」を紹介。トピックの選び方を、教師の趣味にならないように選ぶ必要性あり。教科書に即した内容にしたほうが良い。また、書かせたものを教室内でグループで共有し代表者が全体で発表してもよいのではないか。

2班　MC　梅田　武幸（福井県立若狭高等学校）

各先生方に共通している点は“見た目だけの活動”にならないようにされている点である。例えば、音読活動は非常に重要であり、生徒の英語力を向上させるためには有効なものであるが、慣れてくると思考を働かせる必要はなく、単に「読んでいるだけ」という状態になってしまう。そこで、音読をアウトプットへの一つの過程と捉え、最終的には自分の言葉で要約をさせることが重要であるという意見が各先生方から上がった。

評価に関しては生徒同士の評価、Can-do を活用した評価の在り方などについて議論した。評価の在り方については私自身も試行錯誤中であり、討論をする中でも「活動を評価するのは難しい」、「結局定期テストの比重が大きくなる」といった点が課題として挙がった。しかし、今回の討論を通じて、生徒がなぜ自分がその成績なのかが分かるという仕組み、評価の在り方は非常に重要であると感じた。

3班　MC　大橋　夕紀（福井県立若狭高等学校）

教科書の題材に合わせて、グループ・プレゼンテーションを行う。グループ内でそれぞれ役割ができ、英語が苦手な生徒でもポスター作成で活躍できたり、教え合いができる環境になったりすることで意欲的な学習につながる。グループでの評価になるため、個人で発表するのが苦手な生徒も頑張ることができる。

活動自体も大切であるが、グループの中では「どのようにその材料を扱えば生徒が意欲的に取り組むか」について考える場面が多かった。同じ題材を扱っても、生徒が「自分はできる！やろう！」という意欲を持てるような言葉かけや仕組みがあれば、より効果的に生徒を Active Learner へ導くことができると考える。

4班　MC　板垣洋美（福井県立武生高等学校）

共通した話題は次の2点。

①「自分の意見・考えを何とか表現したい」という思いを教師がいか

に汲んでやるか、その機会をいかに与えるか
・ 思いはあってもその方法がわからない生徒たちには、まずは型を与えてドリル形式で慣れさせる。
・ Small Steps を設けることなど Slow Learner の生徒への工夫をする。
②活動を行った後の評価、生徒へのフィードバックについて
教師による評価、生徒による相互評価、自己評価などその形態は様々であるまずは評価について欲張りすぎず、ポイントを絞って評価させる教師は良かった点について一つ見つけてほめる、などシンプルなことから始めると良いという意見があがった。

5班 MC 牧野剛士（福井県立敦賀高等学校）
・ コミュニケーション英語のワークシートに，必ず「意見・考え」を言わせるような pre-reading 活動と post-reading 活動を取り入れている。また，必ず各パートの最後に各学期最後に行うインタビューテストと同じ評価項目の表を使って自己評価をさせている。
・ コミュニケーション英語の時間を使い，チャプターによっては普段の授業の形式をとらずに，「ディベート」を行っている。ただし，いきなり定型のディベートの形式をとるのは厳しいので段階の手順をとっている。徐々にアカデミック・ディベートの形式に近づけていく。
・ 教員からの評価だけでなく，必ず「自己評価」をさせている。それと同じ評価項目を使ってパフォーマンステストを評価することで，生徒は常に先を意識して言語活動をリフレクションできる。
・ 各学期の最後に行うパフォーマンステストの評価基準や各学期の成績の配分を学期初めに提示することで生徒は目標をもって授業に取り組むことができる。

6班 MC 辻 智生（福井県立敦賀高等学校）
〇低学力者への指導の中での言語活動のあり方。
英語力を考えると生徒の自由度の大きい活動は難しく、教師は躊躇する。即効性のある妙案はないが、まずモデル文を作り、幾つかのポイントを置き換えれば自分の言いたいことができる。また一言でも一文でも話す経験を地道に積ませることも必要だということ、生徒の動機付けを図ったり思考させたりするという意味で映像の利用や他社の教科書の英文を使用して読ませることも有効な手段であると意見が出た。「1分間に120語話す」のように具体的な数字を示して取り組ませることも動機付けという意味で有効だという意見も出された。
〇ディベート指導
中学校でも段階を設ければディベートは可能であることを示していただいた。教師が勝手に生徒の限界を作ってはいけないということをあらためて実感した。ディベートには様々な側面があるが、それら全てを評価することは難しい。時間の面からも実用性の面からも細かいことを気にするべきではなく、幾つかのポイントに絞って評価するべきであるという結論となった。

7班 MC 水谷 友梨（福井県立若狭高等学校）
・ Reading Power という教材を使って、直読直訳の徹底を行っている。今までは、サイドリーダーを使っており、また、シェイクスピアなど原文を読む活動も行っていた。やはり、原文で読むほうが魅力的で意義がある。
・ ことわざを大切にする。忍者に興味があり、先祖が子孫に受け継がせた教えであることわざも似ているところがある。ことわざには、生き残るすべが書かれている。また、国や文化をことわざから学ぶことができ、さまざまな知識を得ることで自己肯定感も手に入れることができる。
・ NHK 教材のエンジョイ・シンプル・イングリッシュ。海洋科学科の生徒に帯活動で読ませ、トピックに関することを自分自身のレベルで考え、意見を話し合う活動を行う。

8班 MC 泉 美穂（神戸大学附属中等教育学校）
1．やってよかった言語活動紹介
・ 本文を読んだ後にグループ毎に各セクション毎に気に入ったところ、impressive だった箇所を選び、理由を言う活動を取り入れた。パーラメンタリー・ディベートの講習会を学校でしたのもあり、summary & refute を参考にした。①4人1組のグループで本文の気に入った箇所を説明する + 自分の意見を言う、②前の人が話したところを言って、更に私はこう思うと意見を加える、という形で取り組みをさせた。型にはめて繰り返し続けることによって、意見を言うトレーニングになった。
2．言語活動の評価の在り方について
・ 評価をどうして良いのかが分からなく困った。一時間の中でプレゼンテーション作成までさせる展開であったので、script に文法の間違いがあるものをどう評価するべきなのかというところが難しかった。また一つ一つの活動をどうやって評価するのかが悩ましい。授業観察のみになりがち。果たしてそれで良いのか。
3．新たに得られた知見・気づきなど
・ ディベートまたはディベートから得た意見、理由を述べる必然性を作ることによって、意見を言わせる活動を増やすことができる。
・ サマリー活動も話さなくてはいけない内容の必然性を作ることによって、生徒の読みを深めることができる。
・ YouTube や IT 機器を活用することによって反転授業など授業時間内だけでなく予習や復習に学びを増やすことができる。

■ グループ討論②：「指導上の工夫・悩み」（簡易報告）

1 班 MC 喜多 千穂（大阪府立阿倍野高等学校）
語彙指導について、単語帳を持たせた上で小テストを実施することで語彙力はつくか？語源を紹介して語彙を増やす方法についはどうか？どうしたら語彙力がつくか（豊中高校・北村先生）→＊単語帳や小テストでは 短期記憶で終わり、語彙力の増強にはなりにくい。ドリルとしては一定の効果はあるが回数は必要。＊内容のある英文の中で、学習していく方がよい＊口頭での練習やテスト。＊表現集などをアプリで作り、ネットで生徒が見られるようにしている。＊単語テストは、やらないと生徒は勉強しないが、やっても定着しにくい。

2 班 MC 大仲志芳（羽衣学園高等学校）
音読活動をどのように評価すればよいか。
・ 目標を生徒に示す。例えば一分間に 100 語読めるようにするなど、具体的な内容を示す。
・ あらかじめ評価のポイントを生徒に示しておく。どこをどう評価するか、これができていれば Grade X というようにするなど、明示しておくと、モチベーションが上がるのでは。

3班 MC 植田 早（奈良県立青翔中学校・高等学校）
将来的にはディベートをさせてあげたい
・ ディベートに行き着くまでに、ペアワークの活動を入れつつ徐々に内容を深めていくことで目標を明確にして計画を立てることができ、将来ディベートにつなげる。授業時数なども考え、少ないならパーラー、多いならアカデミック・ディベートを行うようにする。

4班 MC 浦川 真緒（京都教育大学3回生）
〇生徒の英語の質が期待している程に向上しない
その要因として、適切な補助が不足していること、評価基準の明確化が不十分である。インプットした内容を踏まえ、いかにその内容をアウトプットする場を設けるかが重要である

5班 MC 南 侑樹（大阪府立槻の木高等学校）
〇 Task-based instruction について
・ タスクを通して，言語形式だけでなく，意味重視の学びにつながるようにしている（CLIL のアプローチ）
・ 必ず場面を設定した上で誰が何を伝えるのかを，意識している。
→ その上で頂上タスクとして自らが学びをレポートできるように工夫している。

6班 MC 池田 裕（大阪府立枚方津田高等学校）
英語をなぜ勉強しなければならないか
①日本語だけなら窓が一つ、他の言語を学ぶことにより、窓が増える。
②言語というポケットを増やせば、それだけ友達もできる。
③英語という言語を学ぶことにより、日本語を意識することができ、日本という国を再認識できる。

7班 MC 戸田行彦（滋賀県立守山中学校）
評価には Fluency や Accuracy の両方が実際は求められるが、まずは Fluency から始めることが大切であると確認。具体的にはワードカウンターを用いてペアになり片方が1分間与えられたテーマに沿って話をし、もう一方がペアの話した1語1語を数えていくといった手法がある。